
日本人形とフランス人形

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本人形とフランス人形

【Nコード】

N4453G

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

ゴミ捨て場から思わず拾ってきた市松人形。以後奇怪な出来事が主婦を襲う。それは呪われた人形？再び捨てた人形の行方は？

火曜日。朝7時半に香織はいつものようにゴミ出しに出た。

バイパス脇のゴミ収集場にカラスよけの緑色の網をめぐって持ってきたゴミ袋を置こうとして、香織は思わず

「ひっ」

と悲鳴を上げた。先に置かれたゴミ袋に埋もれて、女の子の小さな顔がじつと香織を見上げていた。

人形だった。黒髪の前髪を奇麗に切りそろえた、赤い着物を着た日本人形・市松人形だった。

頬が薄汚れ、着物のえりも色がくすんで表の糸が細くなって裏地が透けている。

「あら嫌だわ」と香織は眉をひそめて言った。市松人形なんて元は子どもの着せ替え人形だろうにどうしてこんな気持ち悪い顔をしているのだろうか？この顔の肉に埋もれて覗く真っ黒な瞳が・

カア、と、カラスの鳴き声に香織はビクツとかがんでいた背を立ち上がらせた。3メートルほど離れて、バイパスの防音壁にとまって1羽のカラスが羽を動かしながらカアと鳴き、首をカクツカクツと動かしながらまん丸い黒い瞳を鏡でも仕込まれているようにクルツクルツと光らせた。

「カア―ッ」

仲間に呼びかけているのか空に向かって鳴き声を上げる。香織も釣られて見上げると濃い灰色の雲がたれ込めている。

「もう降ってくるかしら？」

顔を戻すとカラスと目が合って驚かされた。忌々しいゴキブリみたいな色つやの鳥。

カラスはクルツクルツと、香織の足下を見た。香織も見る。薄暗い空の下、薄汚れた肌の人形。

クルツクルツと獲物を狙うように様子を伺うカラス。

両者を見比べながら香織は後ずさるようにして、その場を去った。

夫と子どもを送り出し、朝の家事を一通り終え、さてテレビをつけてお茶を飲んでいると、

「あつ、」

と、思い出した。

「そうだわ、今日はゴミ掃除当番だったんだわ」

朝、ゴミ出しに出たときには覚えていたのに、あの人形にびっくりして以後すっかり忘れていた。

窓から外を見て「はあ」とため息をつきつつも立ち上がった。今にも降り出しそうだが幸いまだ雨は降ってきていない。

「保ってちょうだいね」

香織は天にお願いして隣家から回ってきた清掃道具を持ってゴミ収集場に向かった。

「あら嫌だ」

ゴミ収集場に近づいた香織はまた同じせりふを言われた。

清掃車がゴミを収集していった後に、ぽつんと、あの人形が取り残されていた。

頭にぺたりと「ルール違反」の赤字の札が貼られている。燃えるゴミは市指定の有料ゴミ袋で出さなければならないのだ。袋に入られずそのまま捨てられていた人形は「ルール違反」で収集されずに残されていたのだ。

香織は人形を無視して辺りに散らばったゴミ屑をほうきで集めてちりとりを取った。

掃除を終えてさて香織は人形を見た。1日置いて、明日には市のパトロールが回収していくはずだ。

傾斜して建つコンクリートの壁に背中をつけて左に倒れかけながら立っている。40センチほどの背丈の子どもの人形。ポツンと顔に水滴が当たって香織は反射的に瞬きした。

人形の頭に張られた札は顔の半面を隠し、陰から覗く左目だけが悲しそうにじつと前を見ている。

その黒い瞳からポロリと雨水がこぼれた。

香織はため息をつき、

「仕方ないわね」

と、人形を抱き上げて家に連れ帰った。

午後。

学校から帰ってきた息子、春雄が台所にやってきて言った。

「ねえ。ガレージに猫がいるみたいだよ？」

「え！ほんとう？」

香織は驚き言った。

「ちゃんと閉めておいたはずだけどなあ。どこから入り込んだのかしら？」

「鳴き声がしたよ」

「そう」

香織は今夕飯の支度で揚げ物をしている。

「やあねえ。ハルちゃん、追い払ってちょうだい」

「うん」

台所を出ていった春雄はしばらくして戻ってきた。

「猫はいなかったよ」

「そう。じゃあもう出ていっちゃっ・・・」

息子を振り返った香織はその腕に抱きかかえられているものを見てギョツとした。

ゴミ収集場から持ってきてきてガレージの角の物陰に隠しておいた市松人形だった。

「なんでこんなのがあるの？」

息子の問いに

「今日うちが清掃当番だったのよ。雨の中放り投げておくのもなんだかわいそうで連れて来ちゃったのよ」

と答えた。答えながら、改めてなんでこんなものを連れ帰ってしまったのだろうと思った。見たくもないが、人形は息子に抱きかかえられながら黒目がちな目でじつと香織を見ていた。

笑っている・・・ように見えた。気味悪い。

「ふーん・・・」

春雄は人形の脇を持って掲げて眺め、言った。

「ねえ、これってさ、

呪いの人形？」

「なにバカなこと言ってるのよ」

パチツと油が腕に撥ねて香織はアチツと腕を引っ込めた。

「呪い」

「おバカ」

こつちこそその顔を油の鍋に突っ込んでやろうかと思って、香織は自分のその恐ろしい考えに自分で震えた。

「あさって改めて捨てるから、ガレージに置いておきなさい」

「なんだ、けっきょく捨てるんだ？ つまんないの」

「あら、ハルちゃん、女の子のお人形なんて欲しいの？ ガレージに返しておきなさい」

「はい」

春雄はおとなしく人形を抱えてガレージに向かった。

本当に、どうしてあんな物を拾ってきてしまったのかしら？、と、香織は忌々しく、気味悪く思った・・・。

木曜日。

朝、香織は市指定のゴミ袋に人形を入れて他のゴミといっしょにゴミ収集場に出した。

先に出されているゴミ袋の上に横に寝かせて置き、

『誰か心優しい人に拾ってもらいなさい』
と思った。

半透明の袋に顔をくっつけて、人形はじつと香織を見ていた。
香織は清々した気持ちで背を向けた。

夕刻。

台所で夕飯の支度をしていると背後のガラス戸の向こうを誰か人影が通ったような気がした。

「ハルちゃん？」

息子の春雄は学校から帰ってきておやつを食べると2階の自分の部屋にこもって、どうせまた宿題もやらずにゲームで遊んでいるのだろう。

ミシッと、2階の廊下を歩くようなきしみが聞こえた。

春雄だろうと思いつながら、香織は天井を向いたまま首を傾げ、エプロンで手を拭うと階段に向かった。

なんとなくそつと階段を上がり、廊下を眺めても誰もいない。

廊下を歩くと「ミシッ」と大きな音が鳴って香織はビクツとした。夫の親が残した家で、もうずいぶん古い。

奥の息子の部屋に近づくと案の定ゲームの音が聞こえてきた。いつもなら怒るところをホツとしつつ、香織は軽くドアをノックして、「ハルちゃん」

とドアをそつと開けながら中を覗いた。

香織は、ビクツと心臓を躍り上がらせた。

女の子の黒い後ろ頭が見えた。

春雄がピコピコやっている携帯ゲームの画面を横から覗き込んでいる。

『まあ・・・』

と思いつながら香織はそつとドアを閉め、そつと後ずさり、階下へ向かった。

『あらあらいつの間に女の子なんて引つ張り込んだのかしら？』

と、我が子のプレイボーイぶりに思わずニヤけた。

どんな子なのか、下りてきたらそれとなく見てみようと思機嫌に

鼻歌を歌いながら夕飯の支度に戻った。

けれど、料理をテーブルに並べて支度を終え、夕飯の時間を過ぎても女の子も春雄も2階から下りてこなかった。30分を過ぎて、さすがに腹を立てて2階上がった。

「ハルちゃん」

ノックをしてドアを開ける。

灯りもつけずに春雄はゲームに熱中していた。

「ハルちゃん」

言いながら香織は部屋を見渡した。

「ねえっ、ハルちゃん」

「あ~~~~っ！」

ゲーム機からゲームオーバーの『残念でしたー』という音楽が流れた。春雄がひどく怒った声で言った。

「なんだよおー、やつつと、クリアできると思ったのにいいー

ー！」

「何言ってるのよ！」

香織も怒って言い返した。

「ご飯の時間よ！ ゲームばかりやってるんじゃないの！」

言いながら壁のスイッチを押して電灯をつけた。

途端、

視界の端に赤い色が滲んで、香織はハッと振り向いた。

雑誌やオモチャの無造作に詰め込まれたサイドボードの上に、赤い着物のおかつぱ頭の

あの市松人形が香織を見ていた。

「……………どうして……………」

香織は身内が凍り付くような感覚を覚えながら言った。

電灯の白い光に薄暗い陰を顔に載せて、人形は笑っていた。

「ハルちゃん、これ、どうしてここに?…」

確かに捨てたはずなのに。

「なんだよおー、苦労したのにいー」

春雄はぷりぷり怒って香織の脇をすり抜けて廊下へ出ていった。

香織はそんな息子を叱ることも忘れて、呆然と人形を見つめていた。帰りの遅い夫を待たず二人で食事をしながら、香織はなるべくさりげなく訊いた。

「ねえ、部屋にいた女の子、だあれ？」

「何言ってるの？ そんなのいるわけないじゃん」

ゲームクリアを邪魔された春雄はずっとご機嫌斜めで、とりつく島がなかった。

「じゃああの人形は？ どうしてハルちゃんの部屋にあるの？」

「はあ？ 勝手に歩いてきたんじゃないの？」

これもとりつく島がない。

香織は考えて自分なりに答えを見つけていた。

あの人形は春雄の部屋にいた女の子が持ってきたのだろう。というか、登校途中にあのゴミ収集場で見つけて、拾い、学校に持っていったのだろう。それをクラスで見せていて、春雄がそれはうちの人形だと言ったのだろう。どういうつもりか春雄はそれを自分の物だと主張して、女の子から取り返した。でも納得行かない女の子が家まで着いてきて、春雄に談判したが、春雄は無視してゲームをして、女の子は仕方なくそのまま帰ったのだろう。自分が女の子に気づかなかったのは、家人に顔を合わせるのが気まずい女の子がそつと下りてきて、自分も夕飯の支度に夢中になっていて出ていったのに気づかなかったのだろう。

春雄は女の子が嫌いなのか、それともすごく好きなのか？

年頃の男の子にはそういうところがあるものだ。

不機嫌におかずを食べる息子を眺めて、香織はしょうがなく許してやった。女の子は後ろ姿だけだったが、艶やかな黒髪をストレートに背中に流し、なんとなく美人オーラを放っていた。きっと、ま、そういうことだろう。

ニヤニヤ笑う香織に春雄はずっと不機嫌なままだった。

夜。

香織は何か嫌な夢を見て、目を覚ました。喉がなんだか締め付けられるような感じがしてひどく寝苦しい。

カサリ、

と、

何か、布の擦れる音というか気配がした。

香織は真っ暗な家の中に感覚を探らせていった。

カサリ。

衣擦れは階段を下りたところだ。

春雄がトイレに起きたのだらう。けれど、

カサリ。

この衣擦れは、

カサリ。

これは、着物の、

カサリ。

袖……

カサリ。

衣擦れは廊下を進み、今、香織たち夫婦の寝室の外に……

ス、と、引き戸に一条の隙間が。

香織はとっさに枕元の目覚まし時計を見ようとしたが体が動かなかった。

ス。

戸が20センチほど開き、暗がりの中に、足下に、

人形が立っていた。

カサリ。カサリ。カサリ。

人形は歩いてくると、目を閉じることさえ忘れた香織の枕元に立ち、じっと、香織を覗き込んできた。

なに？ なんなの？ 捨てたことを怒っているの？ それとも、それとも、何か言いたいことがあるの？

暗がりの中、人形のシルエットの中、黒目を縁取る狭い白目が三日月形にぼんやり光って見えた。

三日月がかすかに上下が狭まったように見えた。

「お母様」

ああ、笑っているのだ、と思いながら・・・
香織は意識を失った。

朝。目覚まし時計に起こされて見ると、人形の姿はなかった。
春雄が学校に行ってしまっから部屋を見ると、人形はサイドボードの上にちよこんと立っていた。

香織はドアを閉め、もう2度と2階へ上がらなかった。

「ただいま」

と春雄が帰ってきた。

お帰り、と居間から声をかけると、

「どうぞ。上がって」

と春雄が誰かに話しかけていた。

「お邪魔します」

女の子の声言って、二人揃って2階に上がっていった。
あらっ？と香織は思った。今の声は、昨日の女の子じゃないのかしら？

2階から二人の何か話して笑う声が聞こえてきた。

香織はそれを聴きながら上機嫌にニヤニヤした。どうやら仲直りして、なんだかい感じじゃない？

さて、と、理解ある母親としてはどうするべきか？

そつとしておいてやるべきだろうが、昨日の不愉快な態度のお返しに、香織はさっそくお茶菓子を用意して息子の部屋にお邪魔することにした。

コンコンとノックする。

「お邪魔します」

おぼんを持ち、ニコニコ笑ってちん入した。

「なんだよー、何も頼んでないだろー」

春雄が頬を染めて抗議した。はいはい。

「こんにちは。お邪魔してます」

ちよこんと頭を下げる女の子。ああやっぱり、昨日の黒髪の女の子だ。

顔を上げる女の子。

その顔を見て、香織の顔から笑顔が消えた。

奇麗に切りそろえた前髪の下の白い顔は、目尻の切れ上がった黒目がちな一重、小さな鼻に、小さな丸い唇似てる……

あの市松人形の女の子に……

「ほらあ、用が済んだらさっさと出てって」

春雄の声にハツとして、

「え、ええ。おほほ、邪魔者はさっさと退散しましょうね」

と、二人の前のカーペットの上にお茶とお菓子のおぼんを置いてひょいと顔を上げた瞬間に少女と目が合った。

少女は、笑うと、

「お母様」

と言った。

香織は冷たい汗をかきながら逃げるように部屋を出ようとし、ふと、横を見た。

サイドボードの上に、人形はなかった。

「倉田さん、お茶どうぞ」「紅緒でいいわよ」「・・・紅緒さん、お茶、どうぞ」「はい。いただきます」

二人の会話を背に香織はドアを閉めた。

「おほほほほ」

少女の笑い声が、何故か、耳の奥に響いた。

5時を過ぎると少女は

「邪魔しました」

と礼儀正しく挨拶して帰っていった。その明るい声が香織にはどうしても不気味に聞こえてしまうのだった。

食事を終え、春雄が風呂に入っている間に香織はどうしても気になつて春雄の部屋を覗いた。

ドキドキしながら灯りをつけ、ギスギスした目でサイドボードの上を見ると・・・

香織は、

「は？」

と狐につままれた思いをした。

そこには、

青いドレスのフランス人形が立っていた。

クルクルの金色の巻き毛に、おしゃれにレース付きの大きな帽子をかぶっている。

青い瞳のガラスの目がぱっちり開いた顔は、なかなか高価そうなビスクドールだったが、残念ながら肌が黒く薄汚れている。

風呂から上がった春雄にたまらず人形のことを訊いた。

「勝手に入るなよー」

と怒りながら、

「紅緒さんと交換したんだよ」

と恥ずかしそうに言った。

なーーんだ、と香織はホッとした。

冷静に筋道建てて考えればどうということはない、

あの紅緒という少女は自分と似ていたからあの人形が気に入って拾ってきた。春雄も彼女と人形を見比べてそれに気づいて・・・、心密かに懂れていたクラスメートに、親密になりたい一方つい男の子の気恥ずかしさで意地悪に取り上げてしまった。でも紅緒さんは春雄の家に付いてくるほどその人形が気に入っていた。それで今日改めて自分の持っているフランス人形と交換しよう、と、春雄も懂れの彼女の持ち物が手に入るわけだし、商談成立となったのだ。

息子の恥ずかしそうな様子と、自分のこれまでのビクビク怯えた様子を振り返って、香織は「うふふふ」と笑った。

なんだ、バカみたい。全部気のせい、これで丸く収まってハッピーエンド。めでたしめでたし。

と、

香織は思っていた・・・。

昼間。香織は掃除のついでに春雄の部屋を覗いて、フランス人形を今一度よく観察した。

青い目がパツチリしてとても可愛い。

このお人形よりあの不気味な市松人形の方が好きという少女の感性が分からない。おっと、息子の彼女に失礼か。二人はそっくりなほどよく似ているのだから。

香織はフランス人形を抱き上げ、赤ん坊を抱くように、少女の頃そうしてお人形遊びしたように胸に抱きかかえた。

本当に綺麗。

可愛い。

香織は掃除を忘れてお人形を抱いたまま立ち尽くした。

香織は人形に微笑み掛け、

フランス人形も香織に微笑み返した。

青い透き通ったガラスの目が、香織の瞳を見つめ、

香織はまるで吸い込まれるように、
お人形遊びの少女の頃へ、
夢の中へ、

入っていった………。

「叔母さん、こんにちは」

姪の麻希ちゃんが遊びに来た。

「ハルちゃんのゲーム借りるねー」

春雄の姉貴分の麻希は勝手に春雄の部屋に入ってゲーム機で遊びだした。

香織はケンカにならない方がいいけれど、もうじきのはずの春雄の帰りを待った。

しかし春雄の帰ってくる前に麻希が2階から下りてきた。

「ねえねえ、叔母さん、これどうしたの？」

目を輝かせて両手で突き出したのはあのフランス人形だった。

「ああ、それ」

ベラベラおしゃべりしてまた春雄がへそを曲げないかしら？と香織が困っていると、麻希の方は

「いいなー、これ、かわいいーっ！ー！！」

と勝手に盛り上がって抱きしめてキヤーキヤー騒いでいる。

この子は何か気に入ったものがあるとすぐにこれだ、と香織は内心ため息をついた。

ただいまー、と春雄が帰ってきた。

「ハルオ！」

麻希は人形を抱えて玄関に飛び出すと

「これっ！ちようだいっ！」

と元気に言った。香織が、あーあ、こりゃケンカになるなと思っ
ていると、

「いいよ」

と春雄はあつさり言った。

「ヤッター！ゲッター！と大騒ぎの麻希に、香織はびっくりして自分も玄関に出てきた。」

「ハルちゃん。いいの？この人形？麻希ちゃんにあげちゃって？」

「いいよ。持って帰ってよ」

春雄は靴を脱ぎながら面倒くさそうに言った。

「でも・・・」

まだ戸惑う香織に春雄はチラッと怒ったような目を向けて、

「大っ嫌いなんだって、その人形。捨てちゃっていいんだってさ」と言つとさつさと2階に上がっていった。

麻希も

「アチャー」

とさすが女の子の勘で気づいて、

「失恋？」

と2階を指さして言った。

「どうやらそうみたいね」

香織は苦笑して言った。昨日の嬉しそうな様子を思い出すと息子が哀れだ。

麻希は、

「じゃ、これはあたしがもらってかわわないわけね。ラッキー」

と言つて、さすがに母親の香織に舌を出した。

「今日はさつさと退散しまーす」

「はいはい。またね」

現金に大喜びの麻希を香織は苦笑しながら送り出した。

あーあ、行っちゃった・・・

と、愛しのフランス人形を見送りながら・・・。

麻希は自転車のかごに入れたカバンに人形を立たせてルンルンと鼻歌を歌いながら走っていた。

と、突然、小路から黒猫が飛び出した。

「きゃっ」

麻希は悲鳴を上げて急ブレーキを掛けながら慌ててハンドルを切った。

がッタンという衝撃と共にカバンから勢い良く人形が飛び出した。

「あっ、」

まるでスローモーションのように、

車道に飛び出したフランス人形は、

帽子が飛び、金髪をなびかせながら地面に落ち、

走ってきたスクーターに

「ガリッ」

と踏みつけられていった。

「ああ・・・」

麻希はガツカリして人形を拾い上げた。

人形の顔は額から、頬、顎に大きくひびが走り、

バリッ、

「キャッ」

麻希は人形を放り出し、気味悪そうに見つめ、やがて自転車にまたがると一心に家路を急いだ。

パカリと半面の割れた人形の顔の下から、ドロリと錆びた水が溢れ、まるで人間のような、小さなどくろが覗いていた。

「お母さん」

春雄が居間を覗くと、香織は夕飯の支度に立つこともなくぼーっと、テーブルに手について座り込んでいた。

その見開かれた瞳は、ガラスのように空虚で、まるで魂が抜けたようだった。

終わり。

（後書き）

* 近く姉妹編を掲載します。

* ごめんなさい。パソコンが壊れて執筆途中のものも全部消えてしまいました。実は（語り手を変えると）ギャグだったんだよねという仕掛けだったんですが、消えちゃったので、改めて書き直す力がなくなっちゃいました。ごめんなさい。こちら単体で普通のホラーとしてお楽しみください。2009 / 7

* すみません、ようやく続編と言いますか裏話編を書きました。よろしかったら読んでやってください。2010 / 1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4453g/>

日本人形とフランス人形

2010年10月8日15時53分発行